

当所にはOB職員からの寄贈図書からなる文庫があります。

最初には水産増殖センターの津幡初代所長が寄贈された津幡文隆文庫、続いて故村上第七代所長の親族から寄贈された村上圭郎文庫がそれです。

このたび、思いも掛けず直江春三氏から寄贈の事がありましたのでお知らせしておきます。

氏は昭和57年度を最後に初代内水面水産試験場長で退職された方で、当所には水産増殖センター開設当初の昭和43年度から55年度まで貝類部長、漁場部長、次長として勤務された方です。

氏の略歴を下に掲げておきましたように、徳島県水産試験場を振り出しに、福島県を経て本県に奉職、全体では行政での職歴が長いのですが、研究機関では海面、内水面と渡り歩かれております。

従って、蔵書には内水面の養魚関係も多く、多彩な内容となっております。

是非、見てみたいという皆さんの便宜を図る為、蔵書目録を作成し、当所の文書管理に登録しておりますので、御覧になって下さい（職員ポータルの文書管理

から入ります）。目録がすべてを語ります。全369冊から成るもので、今となっては入手不能の昭和30年代のものから近刊本まで、水産関係の専門書を中心とした幅広い中身となっており、氏の並々ならぬ向学心に敬服するとともに、少ない給料をはたいて図書を購入するに際しては、奥様の寛大なご理解があったものと羨ましく思う次第です。

氏のことで忘れてならないエピソードを一つ紹介しておきます。

氏が若かりし頃、福島から十和田市相坂の養魚場に単身、ニジマスの受精卵をもらいに来たことがあります。そもそも、この時から相坂との縁（えにし）が出来たもののように思うのは小生のみでしょうか？

内水面水産試験場記念誌「百年の歩み」（平成13年刊）の歴代場長回顧録の巻頭を飾る氏の「金澤坦場長の想い出の記」にこのことを書かれておりますので、下に一部引用して氏の温厚な人柄を思い出しながら、今後とも末永いご健勝を祈念したいと思います。

なお、氏にはこの6月頃お会いしましたが、82歳にし

てなお矍鑠（かくしゃく）、頭脳明晰であったことをお知らせしておきます。

『私がここ相坂養魚場を初めて訪れたのは、確か昭和27年か28年の1月中頃でした。戦後復興のきざしが出はじめた頃でしょうか。当時私は福島県水産課に勤務間もない若者で、ニジマス種卵分譲を受けるため夜汽車にゆられ古間木（ふるまぎ）駅（今の三沢駅）を経て当場にたどりついたものでした。

昭和初期に建築されたという当時としてはモダンな例の事務所で初めて金澤垣場長にお会いしました。挨拶を交わした後、ふ化室、各飼育池など一巡案内してもらい、養鱒などの指導を受けている話の中で、配合餌にイサザアミを使用されていることを聞き、福島に帰った後、大三沢漁協産のイサザを取り寄せ良い成績をあげることができました。さて、そうこうしている中に発眼卵10万粒の収容も終わり輸送箱梱包も出来、出発準備もOKとなったところで、金澤場長は「寒いから少し暖めて行かねば」と言って丸テーブルの下から一升瓶を持ち上げ、いつの間にか出したコップになみなみと液体を満たしてすゝめてくれた。この寒の最中、外は粉雪がちらついて、10cmほど積もっていたことを覚えている。私もこの液体には相性が悪くない方で、早速ご相伴にあずかり、程なく腹の底から温まり

はじめ、よい心地になり、いよいよ出発となり輸送箱を小型のソリに乗せ養魚場からの小道を職員の方(今もって誰方だったか不明)に曳いていただきトロッコ鉄道?の三本木始発駅（今の十和田市駅）まで送ってくれました。

この記憶が50年前の忘却の彼方から一筋だけ残って、あの気さくな金澤場長の顔とソリ雪道とが重なり印象深い思い出となっている。』

直江 春三（なおえ はるぞう）氏の略歴

大正14年	3月八戸市生
昭和24年	函館水産専門学校卒
昭和24年	徳島県水産試験場奉職
昭和26年	福島県水産課転出
昭和36年	青森県漁政課へ転出
昭和39年	水産修練所配置換
昭和43年	水産増殖センター配置換
昭和56年	内水面水産試験場長で転出
昭和58年	3月退職

注. 氏が相坂養魚場を訪問した時期の記憶に多少のずれがあり、正確には昭和30年2月27日でした。内水研に残っていた当時の往復文書綴を見て確認できました。